2015年6月21日八街教会メッセージ

招きの言葉　詩編136:1-9

讃美歌　SS-6「よろこびの日よ」（讃美歌21-204）

SS-26「うき世の嘆きも」（54年讃美歌530）

聖書箇所：出エジプト記3:11-15

**「わたしは『わたしはある』という者である」**

　本日採り上げました聖書の箇所は、イスラエルの神信仰の神髄を述べた所、と言って良いでしょう。それは即ち、キリスト教の神信仰の前提となっているものでもあります。しかし、古来から、大変議論がある箇所でもあります。旧約聖書全体にとって極めで重要な言葉がここに出てきます。その言葉は新約聖書にも受け継がれ、私たちの信仰生活における大切な御言葉にもなっています。

　まず、この箇所は「出エジプト記」の中で、どのような位置にある箇所でしょう。「出エジプト記」はエジプト王室の中で育ったユダヤ人の子モーセが、奴隷の身にあるイスラエルの同胞をみてエジプトの役人を殺すことになってしまい、アラビアに逃亡し、そこで「主なる神」より、同胞を救いだし、カナンの地まで導く命（めい）を受けました。そして奇跡を起こしてイスラエルの民を引き連れエジプトを脱出、40年の荒野の放浪をへてとうとう「乳と蜜の流れる地」カナンにたどり着きました。モーセはその地を眺めつつも、入ることは許されず死を迎える、という物語です。本日の箇所は、モーセが神様からの命令をうける初めの部分です。一節づつ順番に見て行きましょう。

　まず、11節です。10節で神様の命令があります。「今、行け。わたしはあなたをパロのもとに遣わそう。わたしの民イスラエルをエジプトから連れ出せ」と言われています。これに対し、モーセは「私はいったい何者なのでしょう」と言い、神様の命令を受けいれてはいません。そのため、神様は12節で「私はあなたと共にいる。これがあなたのためのしるしである」とおっしゃられます。神様が常に共にいるのだから安心してエジプトに行きなさい、と言うのです。しかし、モーセは受け入れません。更に、4:1では「ですが、彼らは私を信ぜず、また私の声に耳を傾けないでしょう。『主はあなたに現れなかった』と言うでしょうから」と言い、主なる神の召命に抵抗しています。とうとう4:13で「ああ主よ。どうかほかの人を遣わしてください」と叫びます。これに対し、4:14でとうとう主の怒りが燃え上がります。そして神様は「あなたの兄、レビ人アロンがいるではないか。わたしは彼がよく話すことを知っている。今、彼はあなたに会いに出て来ている。あなたに会えば、心から喜ぼう」とおっしゃられ、更に「あなたが彼に語り、その口にことばを置くなら、わたしはあなたの口とともにあり、彼の口とともにあって、あなたがたのなすべきことを教えよう」と言われ、やっとモーセはエジプトに行くことになります。

　11節に出てくる「私はいったい何者なのでしょう」という表現は旧約聖書の他の箇所にも出てきます。ここでは自分を卑下して、「そんな大それたことをする力はない」ということを婉曲的に言っています。しかし、出エジプト記5:2ではパロが神様のことを指して言っています。「主とはいったい何者か。私がその声を聞いてイスラエルを行かせなければならないというのは。私は主を知らない。イスラエルを行かせはしない」と言っています。ここでは文字通り「主というのは誰なのだ」と言っています。エジプトの王パロはイスラエルの「主なる神」は知らないのです。英語で言う「who」です。しかし、この11節での「何者」というのは「自分はどれほどの力をもったものか」というのを反語的に言っているのです。ずばり、「私はできません」という代わりに、婉曲的に言っているのです。神様に言っているから、このような表現をするのです。その他、ダビデがサウル王に言う時にも使われています。またダビデが神様を讃えつつ王国が建てられたのは自分の力によるものではない、という時にもつかわれています。しかし、問題は、モーセの主の命令に対する抵抗です。最後は、婉曲的表現どころか「どうかほもかの人を遣わしてください」と言い出すのです。ここのところを指して、モーセはアブラハムのような信仰心の篤い人間ではなく、その結果、約束の地に入ることを許されなかったのである、と解釈する人もいます。しかし、神様は、何度もモーセを説得し、4:14で怒るとは言っても、兄アロンが代わりに話してくれる、という助け舟まで用意しています。そしてその後のモーセの扱いは、偉大なる預言者として扱われ、新約聖書では主イエス・キリストの姿変わりに際し、エリアとともに現れる訳です。私たちは、モーセもやはり人であって、欠けの多い人物であった、ということを理解する、とともに、ここではむしろ、神様の忍耐強い、呼びかけのなかに、選ばれた者を大切に扱ってくれる主なる神の慈しみを見るべきです。「私はいったい何者なのでしょう」と言い、与えられる課題から、逃げようとする我々を、イエス様は根気強く導いてくれます。

　次に、12節の「わたしはあなたとともにいる」という言葉です。これは「神共に居まし」ということであり、「インマヌエル」ということです。「わたしはあなたとともにいる」という表現と同一の表現で他に2個所でてきます。創世記31:3です。主なる神がヤコブに言います「あなたが生まれた、あなたの先祖の国に帰りなさい。わたしはあなたとともにいる」。もう一か所はイザヤ書41:40です。「恐れてはならない、わたしはあなたと共にいる。驚いてはならない、わたしはあなたの神である。わたしはあなたを強くし、あなたを助け、わが勝利の右の手をもって、あなたをささえる」と言われています。神様が一緒にいてくださるなんてこんな力強いことはありません。神様はモーセにこのような約束をしているのです。それも無条件です。「何々すれば共にいる」というのではないのです。もうひとつの「インマヌエル」を見てみると、イザヤ書7:14のイエス様の誕生の預言とされている箇所とマタイ福音書1:23のこれを引用した箇所で「インマヌエル」というのが男の子の名前として出てきます。もう一か所「インマヌエル」が出てきます。イザヤ書8:8です。「ユダに流れ込み、押し流して進み、 首にまで達する。 インマヌエル。その広げた翼は あなたの国の幅いっぱいに広がる」と言われています。これはアッシリアの力がイスラエル全体を席播きする、と言う中で「インマヌエル」が使われています。アッシリアが主なる神の手足となってイスラエルを滅ぼす、というのです。これでわかるように、「インマヌエル」は幸せを齎すというのではなく、現にここで大いなる神の力が働く、ということを言っているのです。それは裁きの力かもしれません。神様に忠実に歩もう、とする者にとっては恵みの徴になります。われわれ、新約の民にとってみれば、イエス様の次の言葉がこれと同じことを意味しているでしょう。マタイ福音書11:29-30です。「わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです」とあります。

　13節にいきます。難関です。モーセは神様に「イスラエルの人々から神様の名前を聞かれたら何と答えるのでしょうか」と聞いています。その質問に対し神様は「私はある」というのが名前だ、とおっしゃられるのです。ここで「ある」と訳されているのはさきほど「あなたとともにいる」と言った時の「居る」と同じ単語です。「エフイェー」ということばで「居る」とか「ある」という意味の「ハアヤー」の変化形です。英語で言えばbe動詞です。「私はある」というのは英語では「I am a boy」の「I am」です。わたしは「I am」である、と書いてあります。神様というのは、そこに、ここに厳として存在し、いかなるものにも影響されず、完全な自由をもって、被造物のおりなす歴史を導いている存在者である、ということでしょう。これが聖書が示す神様の第一次的イメージです。オリエントの宗教の中でこのような唯一の存在者を神とするのは稀です。イスラエルの独自な神存在と言っても良いでしょう。しかも、このヘブル語の表現は未完了過去と称し、過去、現在、未来のどの意味で解釈しても良い表現です。むしろ、ここでは過去、現在、未来に亘って存在する、永遠の存在者、それがイスラエルの主なる神である、と解釈すべきでしょう。さらに、この動詞の使役形も同じ形であるという説もあります。使役形とは「何々せしめる」という意味の変化形です。これを前提にすると「私は存在せしめている者である」ということになり、物事が存在するようにさせている存在、即ち創造主であり、この世を支えている存在者である、ということになります。あまり一般的な解釈ではありませんが、イスラエルの主なる神を表現している言葉としては適合している、と言えます。黙示録21:6に「わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である」という神様の言葉があります。ギリシャ語のアルファベットの最初と最後の語をあげて神様が世の初めと最後を与える存在として示されています。宗教によっては、この天地は永遠であり、神はこの天地に内在している、というものが多くありますが、キリスト教は神様がまずあって、この世のすべてのもの、物理的なもの、霊的なもの、思想とか感情とか、すべて神様の創造されたものだ、との考え方です。神様の造られたものを被造物と言いますが被造物の最初と最後は神様のなせる業、という理解です。

　この箇所はいろいろに訳されてきました。新改訳はここであげた「わたしはある」です。・口語訳聖書は「有って有るもの」と訳しています。あの野球選手ダルビッシュ君の名前「有（ユー）」です。イスラム教もキリスト教と同じ神様を礼拝しているのですから、おそらく聖書から採った名前でしょう。それにしてもすさまじい名前をつけたものです。新共同訳は新改訳と同じ「わたしはある」です。カソリックのフランシスコ訳は「ある」であり口語訳と同じです。文語訳も「有て在る者」で口語訳と同じです。但し漢字は「有（ゆう）」と言う字と「在（ざい）」という字と2種類を使っています。かなり凝った表現です。おそらく皆さんは神様の名前としての「ヤハヴェー」という言葉を耳にしたことがあるでしょう。新改訳聖書で、ゴチック体で「主」と訳されているのはこの「ヤハヴェー」です。本日の聖書の箇所でも15節にでてきます。先ほどもうしあげた「在る」「居る」の「エフイェー」とはどういう関係でしょうか。この「エフイェー」は1人称ですが、3人称にして一字を代わり易い他の字に置き換えると「ヤハヴェ―」になります。従って、この「ヤハヴェ―」はこの前に出てきた、12節の「ともにいる」の「いる」、14節の「わたしはある」の「ある」で使用されている、「エフイェー」の変形したものと解釈されています。従って「主」と言う時は、「ありてあるもの」ということを言っていることになります。さらに申し上げますと、なぜ「ヤハヴェ―」と言わず「主」と言うのでしょうか。それは、ユダヤ人は「ヤハヴェ―」という神様の名前を呼ぶのは恐れ多い事なので他の呼び方をしようということで、「アドナーイ」即ち「主」と読むことにしたのです。書くときは「ヤーヴェ―」と書きますが、読む時は「アドナーイ」と読むのです。この「ヤハヴェ―」と書いたものを神聖4文字と言います。なお、「エホヴァの証人」の「エホヴァ」は中世になってから、ある人物が「ヤハヴェ―」と書いたところに、「アドナーイ」の母音記号をつけて「エホヴァ」と読むようにしたのであって聖書的根拠はありません。神聖4文字を「アドナーイ」と読むので、それを結合し、新たな読み方を作ったのです。

　とにかく、聖書では名前というのは極めて重要です。私たちキリスト者はイエス様の名前によって祈っています。「主、イエス・キリストの名によって」と祈っています。日本語でも「名は体を表す」という言葉がありますが、聖書ではそれ以上の意味を持って居ます。名で祈ることで霊がともにある、のです。名を唱えることは力なのです。仏教でも真（まこと）の言葉を唱えることにより、悟りに入ることができるようになる、という教えがあります。「真言」と言われています。出エジプト記3章の記事によれば、「わたしはある」という名から変形して生まれた「ヤハヴェ―」、ユダヤ人の読み方で言えば「アドナーイ」即ち「主」が神様の名前、ということです。ですから「主、イエス・キリストの名によって」ということは、「神であり、救い主であるイエスの名前によって」ということになります。大変な名前で祈っていることになります。

　最後の15節を見てみましょう。最後の所は神様の名前が「主」である、と言っています。その前の「父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、主が」、というのはどういう事でしょう。「父祖の神」と言えば十分のようにも思えます。アブラハムはイスラム教徒にとっても父祖になります。アブラハムはその奴隷ハガルによってイシュマエルを産みますがこの子孫がアラビア人になったのだと言われています。したがって、イスラエルはイサクの子孫である、と言わなければならないのです。更に、イサクにはエサウとヤコブの2人の子どもがいましたが、弟ヤコブは母親リべカの入れ知恵で、エサウの長子の相続権を奪ってしまいました。イスラエルはそのヤコブの系列に属します。エサウは死海の東側のエドムの地の人々になった、とされています。従って、アブラハムーイサクーヤコブの子孫がイスラエルの人々である、と言う訳です。「主」はそのイスラエルの神である、という訳です。ここでは、人類すべての神様が「主」である、というのではなく、イスラエルの神が「主」だと言われているのです。旧約聖書の中には、このようなイスラエルの神としての「主」とこの民族神的制約を超えて、すべての人間にとっての神である主、という2つの筋が交差して現れている、と言えるでしょう。この出エジプト記では民族神の由来を語っています。興味深いのは、「主」を呼ぶときにこの3人の名が常に出てくる、という訳ではないことです。創世記では「アブラハムの神、主」という表現がほとんどであり、「アブラハムの神、イサクの神、主」と言われているのが二か所、アブラハムの兄弟ナホルの名をあげ「アブラハムの神、ナホルの神、彼らの父祖の神」と言っているのが一か所です。これに対し、出エジプト記は3回出てきてすべて、この3人の名が述べられています。新約聖書でも3箇所すべてこの3人の名が出てきます。もっとも新約聖書の場合は出エジプト記の引用ですから当然です。創世記の伝承のなかで次第に民族としてのイスラエルが確立してゆき、この3名の名を繋げることにより、イスラエルの民を特定するに至ったのだと想像されます。私たちキリスト者は「新しきイスラエル」と呼ばれる人間です。血肉ではなく、信仰の系譜として、このイスラエルの伝統の中にあるものです。15節にあるように、私たちは、「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、主」が私を、この世の人々のところに主の福音の証人として、遣わされているのです。「主が共に居られます」。勇気をもって自分が救われたことを証ししましょう。祈ります。（ご在天の父なる御神様、私たちをここに呼び集めてくださいまして主の御言葉を聞く時を与えてくださり、ありがとうございます。今日は出エジプト記から主のみ名を学びました。「ありてあるもの」ここから「主」のみ名が来ていることを知り、改めて、み名の大きさに驚くものです。私たちをみ名に恥じない者としてください。主の導きに従う従順をお与えください。我らの救い主、イエス・キリストのみ名により祈ります。アーメン）。